

令和2年度

長期研修者研究抄録



鹿児島県総合教育センター

令和2年度長期研修研究主題一覧

番号	所属校	氏名	研究主題
1	鹿児島市立武小学校	砂本 貴久	小学校プログラミング教育における授業設計 －「B分類」における授業実践を通して－
2	鹿児島市立西陵小学校	外菌 さおり	外国語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う児童の育成を目指して －やり取りを生んだり、続けたりする指導の工夫を通して－
3	鹿児島市立玉江小学校	山下 泰弘	児童が思いを意欲的に絵に表す図画工作科授業づくりの在り方 －表したい意欲を高め続ける指導－
4	鹿児島市立桜洲小学校	和才 大輔	ストレスや困難に負けないたくましい子供の育成 －レジリエンス育成プログラムの活動を通して－
5	霧島市立日当山小学校	山崎 洋平	主体的に学習に取り組む態度を高める算数科学習指導の在り方 －学習に関する自己調整を促進させる指導を通して－
6	垂水市立垂水小学校	盛岡 佑子	問題解決的な学習における「思考力, 判断力, 表現力等」を育む社会科学習指導の在り方 －児童自ら知識をつなぐ振り返りの場面に基づいた授業設計を通して－
7	鹿児島市立清水中学校	古田 勇樹	心の欲求に注目した生徒指導上の諸問題の未然防止の取組 －豊かな人間関係を目指して－
8	県立伊佐農林高等学校	松尾 京子	よりよい人間関係を構築する生徒の育成 －開発的・予防的カウンセリングを生かした取組を通して－
9	県立皆与志養護学校	前岡 圭太	「できることが増えた。」を実感する重度・重複障害児の教科指導

番号	教科等	氏名	勤務校	研究主題	研究内容
1	情報教育	砂本 貴久	鹿児島市立武小学校	小学校プログラミング教育における授業設計 ー「B分類」における授業実践を通してー	<p>本研究は、各教科等の特質や単元、学習内容等とプログラミングとの親和性を考慮した授業設計の手順や方法を明らかにすることを目的とした研究である。</p> <p>具体的には、「プログラミングと各教科等との親和性を確認するためのマトリクスシート」や、「プログラミング教材選択シート」、プログラミングをカリキュラムに位置付けるための基準を示した「プログラミング教育実施に伴う単元・単位時間レベルでのチェックシート」を作成し、これらを活用した授業設計の手順や方法を「プログラミング教育実践指導ガイド」として整理した。</p> <p>本ガイドを活用しながら授業を設計することにより、プログラミングを通して、児童の各教科等での学びをより確実なものとするとともに、プログラミングを効果的に取り入れた授業を実施することが期待できる。</p>
2	外国語	外薗 さおり	鹿児島市立西陵小学校	外国語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う児童の育成を目指して ーやり取りを生んだり、続けたりする指導の工夫を通してー	<p>本研究は、「話すこと[やり取り]」を生んだり、続けたりする指導の工夫を通して、外国語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う児童の育成を目指した研究である。</p> <p>外国語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う児童を育成するためには、コミュニケーションの目的を明確にし、児童の学習意欲を高め、主体的に学習に取り組むことができるようにすることが大切である。また、児童が知っている知識を活用して、何とかして自分の考えや気持ちを伝えることができるようにしたり、互いの考えや気持ちを伝え合ったりすることを通して、「話すこと[やり取り]」の楽しさを実感させることも大切である。</p> <p>本研究を通して、児童のコミュニケーションへの意欲が高まり、相手に配慮しながら自分の考えや気持ちが伝わるように工夫して伝えたり、相手の考えや気持ちを受容しながら聞こうとしたりする姿が見られるようになった。</p>
3	図画工作	山下 泰弘	鹿児島市立玉江小学校	児童が思いを意欲的に絵に表す図画工作科授業づくりの在り方 ー表したい意欲を高め続ける指導ー	<p>本研究は、児童が思いを意欲的に絵に表す図画工作科の授業づくりについて研究したものである。</p> <p>児童が絵に表す活動において、意欲を失ってしまう原因は大きく分けて「絵に何を表すか思い付かない(発想)」、「イメージどおりに線描できない(線描)」、「イメージどおりに彩色できない(彩色)」、「自分の作品は下手だから見せたくない(鑑賞)」の四つの苦手意識にあることが分かった。この「児童の苦手意識の実態」と「絵に表す活動で育成すべき資質・能力」、「意欲を高めるための手立てのポイント」を基に、「絵に表す意欲を高め続けるための各過程での手立て」及び「評価規準や評価方法」を具体化して授業づくりを行ったところ、児童は高い意欲を保ったまま、絵に表す活動に取り組むことができ、苦手意識の解消や資質・能力の成長を実感することができていた。</p> <p>本研究を通して、思いを意欲的に絵に表す授業づくりには、児童の苦手意識を解消していく視点が必要であることを明らかにすることができた。</p>

番号	教科等	氏名	勤務校	研究主題	研究内容
4	生徒指導	和才 大輔	鹿児島市立桜洲小学校	ストレスや困難に負けないたくましい子供の育成ーレジリエンス育成プログラムの活動を通してー	<p>本研究は、困難やストレスから回復する力であるレジリエンスに着目して、レジリエンスを高めるための指導の工夫について研究したものである。</p> <p>レジリエンスを高めるために、教育活動の見直しの一環として、「レジリエンス育成プログラム」を作成した。具体的には、「レジリエンス育成プログラム」の中に、授業等における「レジリエンスタイム」、教師の働き掛けである「レジリエンス的サポート」、「レジリエンスを高める行事」を設定し、児童のレジリエンスを高める活動を行った。</p> <p>取組の結果、児童のレジリエンスが高まり、「レジリエンス育成プログラム」の有効性を明らかにすることができた。</p>
5	算数	山崎 洋平	霧島市立日当山小学校	主体的に学習に取り組む態度を高める算数科学習指導の在り方ー学習に関する自己調整を促進させる指導を通してー	<p>本研究は、主体的に学習に取り組む態度を高める算数科学習指導について、学習に関する自己調整を促進させる指導に着目した研究である。</p> <p>具体的には、まず、これまでの算数科の学習過程に、学習に関する自己調整の視点を取り入れて構想した。次に、それに基づき、1単位時間ごとの学習過程を、「予見段階→遂行段階→内省段階」とし、それぞれの学習過程において、学習に関する自己調整を促進させる指導の工夫を行った。</p> <p>その結果、学習に関する自己調整を行いながら、主体的に学習に取り組む児童の姿が多く見られた。主体的に学習に取り組む態度を高める算数科学習指導として、学習に関する自己調整を促進させる指導の有効性を明らかにすることができた。</p>
6	社会	盛岡 佑子	垂水市立垂水小学校	問題解決的な学習における「思考力、判断力、表現力等」を育む社会科学習指導の在り方ー児童自ら知識をつなぐ振り返りの場面に基づいた授業設計を通してー	<p>本研究は、問題解決的な学習における「思考力、判断力、表現力等」を育む社会科学習指導の在り方について研究したものである。</p> <p>まず、社会科における思考力、判断力、表現力等とはどのような力なのかを整理し、それらの力を発揮できるような問題解決的な学習過程について具体化した。次に、その中で児童が概念的知識を獲得できるような振り返りの場面の工夫を行った。</p> <p>手立てとして、児童の反応を想定し、「社会的事象の見方・考え方を働かせた問題解決的な学習における指導計画」を作成し、それを基に思考方法を使った調査活動を行った。また、知識をつなぎ、概念的知識を獲得させるために単元終末と一単位時間の終末にまとめの学習を設定し、指導に当たった。</p> <p>その結果、児童は、思考方法のよさを自覚し、学んだ知識をつなげて理解しようとしたり、表現しようとしたりする姿が見られた。</p>

番号	教科等	氏名	勤務校	研究主題	研究内容
7	生徒指導	古田 勇樹	鹿児島市立清水中学校	心の欲求に注目した生徒指導上の諸問題の未然防止の取組 ー豊かな人間関係を目指してー	本研究は、生徒指導上の諸問題の未然防止を図るために、生徒の心の欲求に注目した豊かな人間関係づくりの工夫について研究したものである。 具体的には、まず、マズローの欲求5段階説を参考に、生徒指導上の諸問題の未然防止に特化した欲求説モデル及び生徒の心の欲求を満たす活動モデルを作成した。次に、活動モデルを用いた取組において、心の欲求の充足、人間関係づくり、心の欲求を満たそうとする態度の育成を視点に、授業における認め合いや社会的グルーミング、ワークシートや班活動を基にした話し合い活動等の工夫を行った。さらに、生徒の心の欲求を満たすために、学校行事、道徳科や学級活動等と結び付けた年間指導計画の作成、スクールカウンセラーと連携した取組を行った。 このような取組を通して、生徒は学級活動や班活動、学校行事等で心の欲求を満たそうとする意欲を高め、その姿勢を身に付けることができた。 その結果、心の欲求の充足度や学級集団への適応感を高めることができ、豊かな人間関係づくりや生徒指導上の諸問題の未然防止につながったと考える。
8	生徒指導	松尾 京子	県立伊佐農林高等学校	よりよい人間関係を構築する生徒の育成 ー開発的・予防的カウンセリングを生かした取組を通してー	本研究は、よりよい人間関係を構築する生徒の育成を目指し、開発的・予防的カウンセリングを生かした取組について研究したものである。 具体的には、まず、本研究で目指す生徒の姿や授業の在り方を明確にした。次に、カウンセリングの技法を用いて、構成的グループエンカウンターによる「自己開示」、ソーシャルスキルトレーニングによる「感情を理解するスキル」、アサーショントレーニングによる「自他を尊重した表現」の実践を通して、自他の個性を理解し、尊重する人間関係づくりを行った。 生徒は、このような取組を通して、感情や思考の自己開示ができるようになった。また、感情が複雑であるがゆえに非言語的な表情や視線、身振り手振りにも着目する必要があることを意識できるようになった。さらに、自分の気持ちを大切にしながら、他者へ敬意をもって伝える方法を学習し、日常生活でも実践するようになった。 その結果、学級適応感を高めることができ、よりよい人間関係の構築につなげることができたと考える。
9	特別支援教育	前岡 圭太	県立皆与志養護学校	「できることが増えた。」を実感する重度・重複障害児の教科指導	本研究は、自立活動を主とした教育課程を履修している重度・重複障害児への教科指導に関する研究である。 具体的には、学習指導要領に示された「知的障害者を教育する特別支援学校の各教科の小学部1段階」の各教科の内容を具体的な学習活動で整理した「重度・重複障害児の教科内容表」（試案）を作成した。また、それを基に「教科別の指導」を行い、児童生徒が「できることが増えた。」と実感する姿からその有効性の検証を行った。その結果、各教科の系統性や教科間の横断的な指導を行うために当試案が有効であることが明らかとなった。さらに、当試案の活用により、重度・重複障害児に明確な意図をもった指導が行えることが分かった。 以上のことから、反応が微細で変容を捉えることが難しい重度・重複障害児に、「できることが増えた。」と実感できる授業を行うためには、教科指導が有効であると考えられる。